



Title	チペワ文化の再構築 : Louise Erdrich のLove Medicine をめぐって
Author(s)	室, 淳子
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 131-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

チペワ文化の再構築

— Louise Erdrich の *Love Medicine* をめぐって — *

室 淳子 **

In her 1984 novel, *Love Medicine*, Louise Erdrich portrays two families on the Chippewa reservation in North Dakota. She describes the contemporary Native American situation of cultural loss and alienation in Euro-American society through multiple perspectives of these families and the community they live in.

One of the traditional beliefs of the Chippewa, love medicine, is introduced as a motif in the novel. However, its traditional function as an aphrodisiac does not work in contemporary Native American society. Erdrich parodies acculturation on the reservation through a humorous description of the medicine. Nevertheless, its meaning is reconstructed to accomodate a contemporary Native American context. Erdrich paradoxically shows perseverance of love in the community through the death of a character, an outcome of the “fake” medicine. Most of the characters suffer in their un-certain position between Euro-America and Native America. This suffering is cured as they symbolically “come home” by that love found in the community. The love found in the Chippewa reservation community serves as a healing force, as a medicine of love.

Love Medicine adapts a story from a Chippewa origin myth. An analogy between a young man in the novel, Lipsha, and the myth’s woodland trickster, Naanabozho, is clear. Lipsha himself

* Reconstructing Chippewa Culture : Louise Erdrich’s *Medicine of Love* (Junko Muro)

** 言語文化研究科博士後期課程

assumes the role of trickster in the novel. He recognizes the importance of love found in the reservation community, a love that supports every individual in that community. Although the reservation is itself a place of suffering, it is also a place where community has sustained the Chippewa people and helped them through difficult times. Lipsha's final homecoming to the reservation is symbolic in the sense that he gives hope to his people. His decision suggests a restoration of family, the Chippewa people and Native Americans in general. This is Erdrich's personal reappraisal of neglected reservation lives. In spite of Chippewa/Native American cultural loss, the communal part of their traditional culture has survived and will be reconstructed in a contemporary context.

1 はじめに

Louise Erdrich の小説、*Love Medicine*¹⁾には数多くの人物が登場する。小説は、North Dakota 州 Chippewa 居留地における Kashpaw 家と Lamartine 家を中心に描くが、三世代ないし五世代の人物が各章ごとに語り手と時代を変え、1934 年から 1984 年にわたる物語を展開させる。アメリカ先住民は、ヨーロッパからのアメリカ入植に伴った侵略を受け、かつての居住の場から離れた不毛の指定居留地における隔離を余儀なくされた。アメリカ政府による同化政策は、生活手段・言語・習慣・信仰といった文化全般にわたって先住民文化を剥奪し、西洋的な価値観を強制した。自分たちの文化を否定され、生活の基盤を失った人々は、西洋的な生活に適合することもできず苦境に陥る。そうした苦境を目の当たりにした人々は、居留地における先住民社会に価値を見出せず、新しく豊かな西洋的価値観とそれに基づく「アメリカ」社会に価値を見出し、又、居留地における厳しい現実から抜け出すために居留地を離れ都市で生活しようとする。しかし、そこには先住民を容易に受け入れない「アメリカ」社会の厳しい現実が存在する。偏見が人々を取り巻き、アメリカ先住民としても「アメリカ」人としても生きられない

¹⁾引用箇所において LM と略す。*Love Medicine* は 1984 年に出版された後、内容を一部変更し、数章を付け加えて 1993 年に改訂された。本稿は改定版に基づく論考であり、括弧内の頁数も改訂版に従う。

い人々は、そこでさらなる困難にぶつかるのである。作品は、こうした伝統文化の喪失と西洋文明中心主義的な「アメリカ」社会における疎外との間に立つ現代アメリカ先住民の様々な人々の姿をあらゆる社会問題をも含めて等身大に描いている。

1969年、N. Scott Momaday の *House Made of Dawn*(1968) に Pulitzer 賞が与えられたことを始めに、アメリカ先住民の作家が生み出した様々な文学作品は注目を集めてきた。アメリカ先住民自体の、あるいは作家や作品の多様性を一口にまとめてしまうことは決してできないが、大きく見ていくならば、歴史的背景及び現代の状況におけるアメリカ先住民の人間像を人々自身の視点によって描き出すということと、その困難な状況に対して何らかの解決が与えられるということが、一つの大きな主題であり続けている。

『ラブ・メディシン』は複数のアメリカ先住民の姿を描き出す一方で、困難な状況を解いていく鍵を提示する。作品には表題のラブ・メディシンというモチーフが登場するが、ラブ・メディシンの描写は現代アメリカ先住民の現状を象徴的に示し、さらに逆説的な方法でラブ・メディシンがもたらす重要性を作品の中に再構築させる。本稿では、ラブ・メディシンというモチーフに焦点を当て、作品の中心主題を大きく考察していきたい。

2 ラブ・メディシンの意味の再構築

まず始めに、ラブ・メディシンとは一体何であろうか。ラブ・メディシンをめぐる物語は、初恋の Lulu を慕い続ける夫 Nector の愛を取り戻すために、Marie が孫の Lipsha にラブ・メディシンを手に入れるように頼むことから始まる。愛の薬ラブ・メディシンとは、一種の惚れ薬であると捉えておいていいだろう。文化人類学の研究はアメリカ先住民に伝わるラブ・メディシンの記録を残しているが、例えば、Weslager はアメリカ先住民 Delaware の人々を例に挙げて、次のように説明している。

Some of the love medicines were used by young bucks to entrap reluctant females; others by married persons to assure the affection or faithfulness of a husband or wife; and still others by married women to lure estranged or philandering husbands back

to the wigwam. And, of course, there was always the demand by young girls for magic medicine that would make a certain young man succumb to their charms. (Weslager 90)

Weslager はラブ・メディシンの例として “a special plant obtained in the woods after following certain secret rituals” が使われたことを述べ、特に植物の根に関して言及する (Weslager 90)。チベワに伝わる薬草を研究した Densmore はムラサキ属の植物 (False Gromwell) の種をラブ・メディシンとして彼女のリストに挙げる (Densmore 376)。彼女は、植物を収集する際に “talk and pray” することが必要とされ、“little buckskin packets” に入れてお守りとして身に付けられたと述べ、さらにその知恵と使用法が Midéwiwin の間で伝えられたものだとしている (Densmore 375)。Midéwiwin とは呪医 (medicine man/woman) たちから成る秘密結社であり、特にチベワの間で高度な発達を遂げた (Thomas 123)²⁾。アメリカ先住民の間では、呪医が用いる呪薬 (medicine) に対する治療信仰が広く存在し、西洋科学が導入される以前、それは身体及び精神上の病を癒すものとして先住民社会の中で高い文化価値をもつものであった。ラブ・メディシンもそうした治療信仰と関連する。小説の中ではリブシャがラブ・メディシンについて説明をする。彼は人々の噂を思いだし、具体的なものとして “a charm of seeds that looked like baby pearls”, “frogs in the act”, “nail clips and such” の三つを挙げる (LM 241-42)。しかし、重要なことに、作品に描かれるラブ・メディシンはその伝統的なメディシンを扱ってはいない。このことは、伝統文化を喪失した現代を扱うこの作品においては当然のことであるといえるのかもしれない。ラブ・メディシンの描写にはアイロニーを含んだユーモアが用いられる。作品の至る所に現れるそのユーモアは³⁾、本来ならば決して笑うことのできない出来事を特に重要な局面において滑稽に描くことで、一方で作品が扱うテーマの深刻さを笑いに変えて和らげ、もう一方で痛烈なアイロニーを描き出している⁴⁾。

²⁾ Thomas は呪医の他に “juggler”, “daylight man”, “herbalist” と呼ばれる人々にも治療力が備わっており、特に “daylight man” はラブ・メディシンを専門としたとする (Thomas 123-24)。

³⁾ 例えば、マリーとの離婚を決意してルルの下を訪れたネクターが誤ってルルの家に火をつけてしまうシーン (LM “The Plunge of the Brave”) や、リブシャとキングのトランプの闘い (LM “Crossing the Water”) 等。Silberman 110 参照。

⁴⁾ アメリカ先住民の storytelling の伝統の中で、ユーモアは重要なものとされている。作者はアメリカ先住民特有のユーモアのレトリックをここに取り入れていると考えられる。

まず、ラブ・メディシンが作られる過程から見ていこう⁵⁾。このメディシンを作るのは、呪医でも何でもなく10代後半の青年リブシャである。彼はメディシンの作り方を知らず、その方法を Pillager 大長老に聞くことを恐れ、かろうじて思い出したメディシンを手に入れるすべもなく、考えたあげくに一生番うというカナダ雁を捕えてその心臓で代用しようとする。しかし、狩に失敗したリブシャはスーパーマーケットで冷凍の七面鳥を買い、その心臓を祝福してもらおうと教会に行くが、神父にも修道女にも断われ、結局自分で祭壇の聖水をかけて祝福をするのである。このおかしな過程の背後に、アメリカ先住民が置かれている現代の状況が描かれているということを見逃すことはできない。すなわち、メディシンの知恵や狩文化の消滅といった伝統文化の喪失が一方にあり、もう一方にはカトリックの影響や、スーパーマーケットに見られる現代物質文明の影響が色濃く映し出されているのである。

さらに、リブシャの作り出した「まがいもの(“fake” LM 257)」のラブ・メディシンは効力をもたないどころか、それを口にしたネクターを死に至らせる。この描写もまた滑稽に描かれる。マリーは自分のラブ・メディシンを食べた後、ネクターの分をサラダに盛りつけるが、ネクターはそれがまずそうだといって食べようとせず、食べたふりをしてメディシンを吐き出す。怒ったマリーはメディシンを何とか飲み込ませようとネクターの胸を叩き、その結果、ネクターは喉を詰まらせて窒息してしまうのだ。ネクターは作品を通じて兄弟の Eli と対照的に描かれる。母の下で育ったエリは狩の名人であり、チベワの歌を歌う唯一の伝統文化保持者として周囲の尊敬を集める。一方、寄宿学校に送られたネクターは伝統文化喪失者として描かれ、体格が良く、優秀で、部族長を務めるものの、周囲に翻弄されて老年性痴呆に陥る。彼の滑稽な死は彼の人生へのアイロニーであるとも捉えられるであろう。ネクターはラブ・メディシンへの信仰をもたなかった。本来、ラブ・メディシンは人々の信仰のもとに成立していたものであろう。メディシンは象徴的なものであって、その効力を働かせていたのはむしろそれを信じた人々自らの力によったものであろう。ラブ・メディシンを信じないネクターには、それがたとえ「まがいもの」の心臓でなくとも効き目はなかったに違いない。ここにメディシンという文化形態のみならず、それを支えた基盤である人々の信念までもが崩壊してしまった現実を何うことができる。

⁵⁾ ラブ・メディシンをめぐる物語は小説中の“Love Medicine”の章において展開される。

しかし、ラブ・メディシンが失われ、信仰が失われたとしても、それが伝えた愛という感情は現代にも息づくものである。本来メディシンという文化の中で重要であったのは、呪薬や儀式以上に、それによって引き出された人々自身の感情であったに違いない。アメリカ先住民の貴重な文化は否定され、崩壊していったことで数々の悲劇を生み出した。しかし、その中で決して奪われることなく残されてきたのは、その最も大切な要素である人々の心であり、ここでは特に人々を思いやる気持ちである愛だといえよう。リブシャのラブ・メディシンはネクターを死に至らせる失敗作であった。だが逆に、そのネクターの死によってリブシャは人々の心の中にある深い愛情に気づく。彼はマリーが悲しみのあまりに倒れ込むのを見て衝撃を受ける(*LM* 252)。さらに、ネクターの葬式に集まった家族皆が深い悲しみにうちひしがれるのに心を打たれる。彼は語る。“It struck me how strong and reliable grief was, and death.” (*LM* 253) 彼は、人々の悲しみの中にネクターへの愛情を感じ取るのである。ここにおいて、作品に描かれるラブ・メディシンは、一人の人間の死という逆説的な方法をとることによって、人々の間に変わりなく存在している愛の重要性を明らかにしている。

以上に見てきたように、伝統文化が喪失された現代のコンテキストにおいて、ラブ・メディシンは伝統的な機能を働かせはしない。しかし、その描写によって示された人々の間の愛の存在への認識は、さらに作品全体においても重要なものとなってくる。ラブ・メディシンの働きは伝統的なものから一旦脱構築された上で、改めて作品の中に再構築され、愛の呪薬として作用するのである。以下にその例を見ていこう。

小説中の多くの人物は、多かれ少なかれ何らかの困難——先住民文化の喪失と「アメリカ」社会における疎外と無関係ではない——に直面する。例えば、ルルは政府の寄宿学校においてチベワの言葉や慣習を禁じられ、文化的アイデンティティー喪失の危機に陥る。マリーは自らの出自を否定し、キリスト教と高い社会的地位を求める一方で行き詰まりを感じる。ネクターは居留地の外での先住民への偏見に直面し、居留地にあっても部族長として政府の一方的な政策に翻弄される。Beverly はアメリカ先住民であることを隠して商売を成功させる一方で、「アメリカ」社会にそぐわない自分を感じ続けている。あるいは、Gordie は厳しい社会状況に適合できなかった妻 June の死をきっかけにアルコール中毒に陥る。現実にも精神的にも居留地という共同体を離れて、人々は先住民社会と「アメリカ」社会との間でアメリカ先住民としての自己の存在を問われるのだ。

小説中には“come home”という言葉が多く使われている。その言葉は彼らが不安定な状態から脱却し、精神的な自己回復を遂げることを象徴するかのように入れられる。それを可能にするのは彼らを囲む人々の思いやりである。ルルの場合、母Fleurの声の思い出と養祖父Nanapushの手紙とが彼女が「帰る」ことを可能にさせる(LM 69)。マリーの場合、フルーと義母 Rushes Bear の二人の老女が、彼女の出産を助けながら使ったチベワの温かくて頼もしい言葉の響きによって、「帰る」きっかけを与えられる(LM 104)。

しかし、現実には「帰る」ことができない者も多い。Henry Junior の例を考えてみよう。彼は軍隊に徴兵されるアメリカ先住民の例にもれず、戦争後遺症に激しく苦しみ、ついには川に入水する。溺死というチベワにとっての最悪の死を選んだ彼は、古い言い伝えに従えば、どこにも居場所を見つけないことができず、永遠にさまよい続けなければならない(LM 295)。しかし、彼の母ルルは彼を思っそう言う。“...I broke custom very often and spoke Henry Junior's name, out loud, on my tongue. I wanted him to know, if he heard, that he still had a home.”(LM 295) 兄の死に衝撃を受けた Lyman も彼を長い間思い続ける。マリーとの無言の対話から溺死した者も「帰る」ことができると思うに至った時、ライマン自身もヘンリー・ジュニアも精神的に「帰る」ことができる(LM 323)。「帰る」ことができなかった人々は、ヘンリー・ジュニアと同様に、人々の彼らに対する思いによって象徴的なレベルにおいて「帰る」ことが可能になるのである。

『ラブ・メディシン』においては、人々の苦しみはその周囲の人々の愛情によって癒される。ラブ・メディシンは小説の中でその意味を再構築させるが、人々に癒しを与える愛こそがここでは真のラブ・メディシン、すなわち愛という呪薬であるといえよう。リブシャはマリーに向かってこう語る。“Love medicine ain't what brings him back to you, Grandma. No, it's something else. He loved you over time and distance... It's true feeling, not no magic.”(LM 257)

人々の中の愛の存在や家族の重要性の強調は、あるいは非常に陳腐なテーマであると考えられるかもしれない。しかし、アメリカ先住民の現状を考慮すれば、このことは決して当り前のことではなく、強調するに十分に値するに違いない。『ラブ・メディシン』における家族は決して理想的な家族とはいえない。例えば、両親不在のリブシャは、夫ゴードーの下を飛び出したジューンと脱獄囚の Gerry の子であり、たくさんの子供と養子を育てるマリーの養子として引き取られる。Albertine は、結婚以来二度と姿を見せないスウェーデン人の娘として生

れる。ルルの9人の子供たちは皆、父親の違う子供たちである。Hawardの両親のKingとLynetteは常に喧嘩をしている、というように。小説の最初の章は1981年のジューン死後のキャッシュボー一家の姿を描く。ホームパーティーのためにたくさんの美しいパイが特別に作られるが、家族が次々と解散していった最後に、それらは喧嘩によって潰されてしまう(LM 41)。パイが温かで幸せな「アメリカ」の家族の典型を象徴するならば、パイの崩壊はその理想像の崩壊、すなわち『ラブ・メディシン』における家族の姿を表わしているといえよう。そのような否定的な家族の中に人々を支える愛情が存在していると認識することは重要である。むしろ、崩壊した家族が肯定的に描かれていることによって、ここではパイの虚像を崩しているとも考えられるのである。

3 チベワ文化の再構築

さてここで、リブシャがトリックスターとしての役割を担っていることを指摘しておきたい。幾人かの批評家が指摘するように、ルルとゲリーがもつNanapushの姓はチベワの創世神話におけるトリックスターのNaanabozhoに由来すると考えられる⁹⁾。ルルとゲリーの血を引くリブシャは、ナナプッシュの名はもたないものの、彼らと同様にトリックスターの性質をもつ。ゲリーは実際に、自らの逃走を助けた息子リブシャに対して、“You’re a Nanapush man”(LM 366)と認めている。ラブ・メディシンをめぐる滑稽な役割を演じながらも、メディシンを作り愛の重要性を見出していくリブシャの姿は、おかしな行動をとりながら、そのことによって却って物事を良い方向に運んでいく、コミック・ヒーローであり呪医でもあるトリックスターの姿に重なるものである。

リブシャはさらに作品全体の中でもトリックスター的役割を演じている。ナナボズホーをめぐるチベワの神話は、興味深いことにリブシャをめぐる小説『ラブ・メディシン』の物語によく似ている。ここでもまたラブ・メディシンの場合と同様に、チベワの伝承が変容された形で現代のコンテクストの中に再構築される。神話を簡単にまとめると次のようになる。祖母に育てられたナナボズホーは、自分の母親が粉々に吹き飛ばされたことを祖母に聞かされた後、彼女の死の理由と状況を探そうと旅に出、ついに怪物を見つけて賭けをする。ナナボズホーが賭

⁹⁾ McKenzie 59, Owens 199, Towery 104。Naanabozhoの名前に関しては、他にManabozho、Nanabush、Winnebozhoといった呼び方がある(Vizenor 1989, 210)。

けに勝ったため、チペワの人々は魂を闇の国に奪われることはなかった (Vizenor 1984, 3-12)。

リブシャも同じく祖母マリーに育てられる。森に育ち、古来のチペワの性質を最も純粹かつ繊細にもっていた彼の母ジューンは、登場人物の中でもチペワの苦難を最も象徴的かつ典型的に示す人物である。彼女は居留地での生活に耐え切れずに都市に逃れるが、その生活にも適合できずに、両方の板ばさみとなって自殺をする。小説の冒頭に描かれる酒場と車中の売春シーンとにおいて、死の直前の彼女は自分が粉々になってしまうように感じている (LM 4, 5-7)。リブシャは、もう一人の祖母ルルから両親が誰であるのか初めて知らされる。ジューンの死の原因となった、先住民に課せられた歴史と社会状況という目に見えない大きな怪物に対して直接の勝負を挑むことは不可能であろう。旅に出たリブシャは父ゲリーに会おうと異父兄キングを訪れ、トランプの賭けをして勝ち、手に入れた車で父の逃亡を助け、自らは居留地に「帰る」ことを決意する。

リブシャのこの「帰る」という行為は象徴的である。というのも、彼はここで多くの登場人物が辿ってきた、居留地を離れる方向とは逆の方向を選択するからである。居留地はアメリカ先住民が住むことを余儀なくさせられた場所であり、先住民の文化喪失と厳しい社会状況を結集させたかのような場所である。人々は安定とチャンスを求めて常にそこを離れようとし、希望を求めた「アメリカ」社会においてさらに新たな厳しい現実におつかった。ここで認識しなければならないのは、居留地という場所が厳しい現実を抱えた場所であると同時に、人々が作り上げてきた人々にとっての大切な共同体、すなわちリブシャの言葉を借りれば、“a place where he was known and belonged” (LM 362) であるということだ。悲惨な場所であったとしても、人々は居留地において現実に生き抜き、家族を中心とする共同体の中で自らの新しい文化を築き上げ、お互いの愛情によって支え合ってきたのである。多くの人々は居留地を離れることで、自らを支えてきた共同体からも切り離されてしまった。リブシャは他の登場人物と同様に一旦は居留地を離れるが、父に会い、周囲の人々の愛情とその生を理解することで、多くの人々が居留地の否定的な側面に捕われて見逃してきた、人々を支える共同体の重要性を認識する。そのことによって、彼は居留地に「帰る」ことを決意し、精神的にも「帰る」ことができるのである。

小説の冒頭におけるジューンの悲惨な死は、決して悲劇的には描かれない。居留地に「帰る」ことを決意した彼女が居留地に向かって雪の中を歩いていく様

(“as if she were walking back from a fiddle dance or a friend’s house to Uncle Eli’s warm, man-smelling kitchen.” (LM 6))は、美しくもあり楽しそうでさえある。大好きなエリ伯父さんのような、彼女を思い、支えてくれる人々がいる場所、すなわち “a place where she was known and belonged” として、居留地を捉えることのできたジューンの最後は「帰った」と描写される (LM 7)。ジューンの周囲の人々はジューンを愛し、彼女の死後も彼女のことを思いやる。そして、死によって現実には「帰る」ことのできなかった彼女を息子のリブシャが象徴的なレベルにおいて「帰ら」せるのである。ジューンを理解した彼は、小説の最後において自らが居留地に帰ることを決意すると同時に、ジューンを連れて「帰る」のである。

リブシャが「帰る」ことを決意した小説の最後は次のような言葉で締めくくられている。

I’d heard that this river was the last of an ancient ocean, miles deep, that once had covered the Dakotas and solved all our problems. It was easy to still imagine us beneath them vast unreasonable waves, but the truth is we live on dry land. . . . So there was nothing to do but cross the water, and bring her home.
(LM 367)

『ラブ・メディシン』においては、水のメタファーが非常に多く用いられている。そのメタファーは綺麗でありながら、重たく、悲しく、決して流れに逆らうことのできない、すべてを覆い尽くしてしまうようなイメージを与えている⁷⁾。そこに暗示されているのは、“unreasonable waves” の中にあったアメリカ先住民自体の姿であるが、ここでリブシャが示すのは、自分たちが実際には “dry land” という現実には生きているのだという認識であり、それ故に、「アメリカ」人とアメリカ先住民、「アメリカ」社会と居留地、精神的自己喪失と回復、生と死、あるいはアメリカ先住民の過去と現在とを隔ててきた、“the boundary river” (LM 366) を越えていこうとする行為である。居留地に「帰ろう」とするリブシャの行動は、

⁷⁾ 水のメタファーは、例えば周囲に翻弄されたネクターが自らの人生を川になぞらえる箇所 (LM 124) や、ヘンリー・ジュニアの死を描くシーン (LM 193) 等に見られる。

困難の中にあった家族、ひいてはチペワの人々ないしアメリカ先住民全体の希望となりうるものである。ナナボズホーと同様、トリックスターとしてのリプシャは、ここでチペワないしアメリカ先住民全体の回復を象徴的に暗示しているといえよう。

ここでもう一度パイの例を引き合いに出してみよう。アルバタインは喧嘩によって壊されたパイを何とか元に戻そうとするが、結果としてこう語らざるをえない。“...once they smash there is no way to put them right.” (LM 42) 壊れたパイが、決して元に戻らないのと同様に、アメリカ先住民の崩壊した文化をそっくりそのままと通りに戻すことができないのは、悲しくとも避けられない現実である。『ラブ・メディシン』はそうした現実を踏まえた上で、現代のアメリカ先住民の生を描き、またラブ・メディシンという伝統的なモチーフを用いながら、それを現代のコンテクストの中に再構築させた。アメリカ先住民は長い間悲惨な歴史に翻弄され、多くの犠牲を強いられた。しかし、これまで考察してきたように、その悲惨な歴史の一方で人々は生き抜き、人々の愛情によって支えられた自らの共同体の中で新たな文化を作り上げてきたのである。先住民の文化の変容は余儀なくさせられたものであったが、生き抜いてきた人々の生とそのことによって生み出された文化は評価に値するものであるだろう。従来の文化が喪失させられたとしても、それが持っていた重要性はラブ・メディシンの愛のように現代においても息づき、現代のコンテクストの中で再構築させることができるに違いない。

4 おわりに

現代アメリカの多文化主義社会において、これまで考察してきた事柄は、ひとりアメリカ先住民の状況に留まるものではない。従来の文化を否定され、西洋文明中心主義社会の中に取り込まれてきた状況は、多かれ少なかれ、他の多くの周縁に位置する民族集団にも当てはまるものである。もちろん、それぞれの歴史背景は異なっており、世代・性別・階級の差やメインストリームとの関係による違いがあるのは自明のことである。だが、『ラブ・メディシン』において作者が提示する、否定されてきた人々の生とその共同体に対する肯定と再評価は、ノースダコタのチペワ居留地という一地域を越えてより普遍的に捉えることができるだろう。

『ラブ・メディシン』はチベワの伝統や歴史性、政治性を前面に押し出した作品ではない。居留地という共同体を再評価することは、アメリカ先住民に課せられた歴史や政治状況を容認してしまう危険性をはらんでいるかもしれない。西洋中心の長い歴史の中で失われた伝統文化の重要性を再認識することや、依然として継続する抑圧の歴史・政治状況に対して批判を加え、対抗していくことは継続的に必要なことである。しかし、現実には生きるアメリカ先住民に対して与えられる多くの否定的要素の中に提示する肯定的要素の大きさは、同時に計り知れない重要性をもっているであろう。この作品が多文化主義社会に提示するのは一つの、しかし重要な肯定であると捉えることができるのではないだろうか。

引用文献

- Corlett, William Thomas. *The Medicine-Man of the American Indian and His Cultural Background*. Published by C.C.Thomas. c1935. N.Y: AMS Press, 1977.
- Densmore, Frances. *How Indians Use Wild Plants for Food, Medicine and Crafts*. Formerly titled *Uses of Plants by the Chippewa Indians*. 1928. N.Y: Dover Publications, 1974.
- Erdrich, Louise. *Love Medicine*. N.Y: Holt, Rinehart and Winston, 1984. New and Expanded Edition. N.Y: Harper Perennial, 1993.
- McKenzie, James. "Lipsha's Good Road Home: The Revival of Chippewa Culture in Love Medicine." *American Indian Culture and Research Journal* 10.3 (1986)
- Momaday, N. Scott. *House Made of Dawn*. N.Y: Harper & Row, 1968.
- Owens, Louis. "Erdrich and Dorris's Mixedbloods and multiple Narratives." *Other Destinies: Understanding the American Indian Novel*. Norman: University of Oklahoma Press, 1992.
- Towery, Margie. "Continuity and Connection: Characters in Louise Erdrich's Fiction." *American Indian Culture and Research Journal* 16.4 (1992)
- Vizenor, Gerald. *The People Named the Chippewa: Narrative Histories*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1984.
- . "Trickster Discourse: Comic Holotropes and Language Games." *Narrative*

- Chance: Postmodern Discourse on Native American Indian Literatures.* Ed. Gerald Vizenor. Albuquerque: University of New Mexico Press, 1989.
- Weslager, C. A. *Magic Medicines of the Indians.* Wallingford, Pennsylvania: The Middle Atlantic Press, 1973.